

高橋哲哉・山影進編「人間の安全保障」東京大学出版会 2008年4月24日刊を読む

## 読み書きと生存の行方

1. 「人が生きていくためには読み書きが重要である」という考え方は現在、多くの人々が共感する重要な考え方である。しかし、読み書きと生存の関係は水や食料の場合ほどに直接的なものではなく、両者の関係が問題になり始めたのは歴史的に見ても最近のことである。本章では、この新しい課題の意味について考えてみよう。
2. 「人が生きていくためには、基礎教育、特に読み書きが重要である」という考え方は、多くの人々が共感する、現代世界では広く共有される考え方である。理念としては国連の人権憲章や各国の憲法に表明されているし、国際統計上でも(後で検討するようなデータの質については問題があると指摘されながらも)、就学率や識字率と収入や平均余命の間に緩やかな相関関係があることが認められている。読み書き(ないしリテラシー)は、流行の変化が激しい国際協力・開発援助業界にあって地味ながらも常に顔を出し続ける定番テーマの1つである。
3. 最新の国際統計によると、現代世界には後発発展途上国を中心に 15 歳以上の「非識字者(illiterate people)」が 8 億 6 千万人もいるという。事の重要性を鑑み、国連は 2003 年から「自由としてのリテラシー(Literacy as Freedom)」というスローガンのもと「国連リテラシーの 10 年(UN Literacy Decade)」を開始し、途上国の読み書き問題に積極的に取り組んでいる。ほかにも、「万人のための教育目標(EFA goals)」、「ミレニアム開発目標(the Millennium Development Goals. MDGs)」、「国連女子教育イニシアチブ(the UN Girls' Education Initiative. UNGEI)」、「国連持続可能な開発のための 10 年(the UN Decade for Education and Sustainable Development 2005-2014)」などが読み書きを開発の最重要項目の1つとして掲げている。
4. しかし、「人が生きていく上で読み書きが重要である」という一般論のレベルでは多くの人々が賛同するとしても、いざ「何をいかに読み書きすべきか?」という具体的な話になると、議論百出で単純明快な処方箋は見つからないのが現実である。重要でありながら(いや、重要だからこそ、というべきか)簡単な答が見つからない問題は読み書きに限ったわけではないが、読み書き問題に関しては1つ重要な特徴がある。それは、ほんの半世紀ほど前までは現在のように地球上のすべての人の生活にかかわりを持つような事柄ではなかった、ということである。
5. ホモサピエンスが図的な表現を始めた時期はおおよそ 7 万年ほど前まで遡るといわれる(Blombos Cave Project. <http://www.svf.uib.no/sfu/blombos/>; cf. ミズン、1998)、その後、図的な表現の一部が言語の視覚的表現に特化した機能を担うようになったのは 6 千～5 千年ほど前、しかもメソポタミアや少し遅れて東アジアや中央アメリカなど一部の地域でのことに過ぎない。その後も近代に至るまでは、日常的に読み書きをしながら生活していたのは世界の一部の地域の一部の人々に過ぎなかった。衣食住のように生存そのものに直接的に影響を与える要素とは違って、「紙やペンの取り扱い」が人間の生存に少なからぬ影響を及ぼすという事態が世界規模で現出してから、大目に見積もってもまだ 1 世紀程度しかたっていない。20 万年にも及ぶホモサピエンスの

歴史の中ではごく最近のことである。

### 読み書きの道具——文書や筆記用具——の研究

7. 古来、人間が読み書きのための道具に施してきた様々な工夫に対応するように、考古学、技術史、書誌学、工学など、多様な研究が行われてきた。近代以降、その中心的位置を占めてきたのは印刷物であるが、近年、コンピュータなどの電子メディアの比重が高まりつつあり、その進展につれて次第に「読み書き」という言葉がそぐわない使い方も増えつつある。

### 読み書きという行為の研究

8. こちらについても、絵、図表、数字、文字など、書面上に展開する視覚記号の多様性に応じて多彩な研究が行われてきた。どれほど意識的であるかはともかく実質的に人文系の学問のほとんどが何らかの形で読み書きの研究に関わってきたといってもよいであろう。また、読み書きの心理学、認知科学、精神科学のように定量的、応用的な側面を持つ研究も進められており、それらの関心は道具への関心とも密接に連動している。

9. しかしながら、これらの長い伝統を持つ研究群の中で、地球規模で読み書きが私たちの生存とかかわりを持つという新しい事態に積極的に取り組もうとする動きはまだ少ない。私たちは近代化と呼ばれる大変化に伴って生じた「読み書きと生存」という新しい課題に対していったいどのように対処すべきか、いまだ試行錯誤を続けているというのが現状である。

10. そのような全体的傾向の中で、読み書きと生存という課題を積極的に追究してきたのは、1970年代以降に発展してきたいわゆる「リテラシー・スタディーズ(Literacy Studies)」である。リテラシー・スタディーズとは体系だった専門領域というよりも「リテラシー」を共通のキーワードとする極めて学際的な性格の強い雑多な研究群であるが、開発援助や国際協力もその重要な研究テーマの1つとして位置づけられている。リテラシーというアプローチによる開発研究はいろいろあるが(Rassool, 1999; Wagner, 1995)、近年の動向は2005年にUNESCOが公表した*Education for All-Global Monitoring Report 2006: Literacy for Life*(『万人のための教育報告2006——生きるためのリテラシー』)にまとめられている。

11. 「読み書きと生存」という主題を考える際には、上記のUNESCO報告書に代表されるようなリテラシー・スタディーズの動向を軸に考察を進めるのがいわば定番の展開であろう。しかしながら、以下では、従来のリテラシー・アプローチではあまり注目されることのない観点からのこの問題について考えてみたい。それは、読み書き・印刷用紙の消費動向と生存の関係である。手始めに、人々の暮らし向きを示す指標としてよく参照される人間開発指標(Human Development Index. HDI)を見てみよう。

P.79 ~ 81

### <コメント>

人間の安全保障を形づくるものとして「保護」と「能力強化」がある。「能力強化」の第一は「読み書き」で、読み書きは生存とも直結する。本書で東京大学での研究成果を十分に研究したい。

— 2016年9月12日(月) 林 明夫記 —